

平成27年4月号

今月の断酒表彰

- | | | |
|----------|-------|-------|
| ☆ A・D さん | 吹田支部 | 断酒二年 |
| ☆ S・Y さん | 南千里支部 | 断酒三年 |
| ☆ T・H さん | 南千里支部 | 断酒十一年 |
| ☆ T・T さん | 吹田支部 | 断酒十七年 |
| ☆ D・S さん | 南千里支部 | 断酒十七年 |

断酒表彰おめでとうございます。ますますのご活躍を期待いたします。

<平成27年3月1日入会>

- ☆ B・M さん 南千里支部

新しい仲間です。よろしくお願ひします。

断酒に思う (56)

断酒会に入会してから変わったこと

吹田支部 A・D

6年前に平野先生から半強制的に入会させられた断酒会、何回ものスリップ(再飲酒)を繰り返して、それでも続けています。

今、その当時の平野先生の言葉を思い出すと「断酒を続けていると年々考え方が変わってくる」とおっしゃっておられたのを思い出します。あの時、今まで長い間育ってきた環境等、中学生でもなかなか変わらないのに考え方なんか変わるかと思っていました。

入会当初は、酒は、悪くない。私は、酒に助けられた。と体験談で言っていたことを今、思い出しています。当時は、何か解らないまま断酒会へ入会しました。いろいろ疑問点も多く。みんな何で「酒」を簡単に諦めるの?とか、医者が言ったって物理的に解らない。本当にアルコール依存症か再度確認するなどを妻が実家に帰る時に計画を立てて実施する。と言った具合でした。あまり断酒会員ともかかわらず1年経った頃、こんなふざけた会員はまじめな会員さんに失礼だと自分で思い。止めます。と一度は言いました。断酒会へ行かずに酒飲みに行こうか?と思うこともありました。その後何とか踏みとどまったのは妻に止めるとは言えなかったからです。

通っている内に体験談を聞ける様になり、足がつるとか歯が抜けるとか御神酒を何杯も飲むとか喫茶店でビールを頼むとか万年下痢をするとかを聞き、



平成27年4月1日発行 No.146

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

その場で質問したい事も多々ありました。でも、聞くことが出来ないのでメモを取るようになりました。後に聞く機会があり、聞いてみると何と同じ行動をしていた人が多いことか。

そんな自分でも、だんだん周りの仲間たちが見える様になって来ました。断酒会の人達は、とにかく優しい。よく見ると断酒会では経験の長い方達が例会を守るために何の報酬も無いのに、ひたすら奉仕をされています。自らの休日の時間を割いて会議・研修会。飲酒運転撲滅キャンペーン等酒害者更正活動。会長自ら会場の設営・仕事もあるのに広報活動等の無償奉仕。「助けてもらったのだから、お返しをする。」という考え方に触れて自ら徐々に手伝いたい。と思う様になりました。

今私は、入会当初から大分考え方が変わった様に思います。断酒会にいると人は変われることが実感しています。

今月の「指針と規範」断酒会規範

八 断酒会は酒害相談はもとより、啓発活動を通して社会に貢献する

断酒会員の誠意ある説得で断酒会につながり、現在、「断酒幸福」を自らの手にした人は数え切れない。

われわれは断酒できた喜びを断酒会に感謝すると同時に、時間と労力をいささかも惜しむことなく、われわれのために誠意の限りをつくした先輩会員に心から感謝している。そして、そうした人間愛に充ちた行動が一部の会員に限らず、断酒会員全員の使命であり、断酒会の伝統であることを知った。

会員同士の一体感が自らの断酒を可能にし、断酒会を支える最大の力になっていることも知った。また、その一体感が会員だけに限らず、広く酒害者同士にもあるべきものだとして理解し、現在、積極的に酒害相談活動に取り組むようになった。

従って、断酒会は酒害相談はもとより、啓発活動を通して社会に貢献する断酒会は自らの断酒のみならず、酒で苦しんでいる地域の酒害者のために何をすべきかを常に考え、積極的に援助活動をする組織である。援助活動の大半は酒害相談であり、われわれの義務といえるものである。

またわれわれの活動は、酒害相談活動に止どまるものではない。

近年、アルコール依存症に対する社会の関心が高まり、われわれ断酒会員の役割は、酒害者だけが対象ではない時期になっている。

断酒会は元来、酒害者が自らの意思によって酒を断つ組織である、という認識で現在まで成長してき

たが、もう一步踏み込んで考えると、断酒会は酒害者の最後のひとりも残さないという大目的を持つ組織であり、それは断酒会を必要としない社会をつくることでもある。

そうした悲願を達成するためには、酒害相談のみならず広く社会に向って酒害の怖ろしさを伝え、酒害者をつくらないための酒害啓発活動を行う必要がある。酒害の知識のない人、誤った知識を持っている人たちが啓発することで、過去、社会に何の貢献もできなかったわれわれが、社会に貢献し、社会にとっても必要な人間になることができる。

断酒会は廃酒思想を持っていない。社会に酒のあることを容認しながら、自らの酒を否定する組織として発足したために社会に受け入れられた。断酒会は会員が姓名を名乗るという原則を持つことによって、個々の存在が知られ、地域の多くの酒害者の断酒を可能にした。断酒会活動の最後にあるものは、酒害者をつくらないための啓発活動である。

問題飲酒が始まっているのに、自分を適正飲酒者だと思っている人がいる。家族は悩んでいるのに当人は何の不安もない。そうした家庭に酒害の実体を伝えるのも断酒会の仕事である。

挫折が原因で一時的に酒を乱用している人を、われわれと同じ酒害者にしないため、酒害の正確な情報を与えることも断酒会の役目である。

適正飲酒ができていても、将来に不安を持っている人や家族がいる。そうした人たちの相談に乗り、転ばぬ先の杖になるのも断酒会の役割である。

まだ飲酒経験のない若者たちに酒害の怖ろしさを伝えるのも、反面教師としての断酒会員の役割である。学校教育だけで本当の怖ろしさが充分理解されないと思うからである。

そうした幅広い活動がなされることによって、断酒会の存在価値が広く社会に浸透し、今後の断酒会活動をより容易にする。

ある依存症の一日①

原作：大介 作画：みのり



(指針と規範 P87～P90)

